

ありのままを生きるというかたち — 治すという発想を越えて —

奈良女子大学名誉教授 浜田寿美男

0 世の中には「支援」や「援助」があふれているけれど……

発達途上の子どもたちや障害をもつ人たちを「支援」し「援助」という言い方は、一見非常に分かりやすく見える。しかし、そこにはある錯覚がつきまとっている。この「錯覚」の怖さは、世の中のほとんどの人が「錯覚」すれば、その「錯覚」こそが「現実」となって、「世の中」を支配するところにある。

ここでは学校年代の子どもたちについて、その「支援」「援助」を考える

1 いま子どもたちの世界をおおっている「錯覚」

子どもは発達する。その発達がうまくいかない「障害」に出会ったとき、その障害を克服し、軽減するために「支援」することは当然と思われている。しかし、その「支援」もまた世の中の「錯覚」を免れてはいない。

◎今日の発達観（子育て観、教育観）のおかしさ

いま「子どもたちは、おとなから守られながら、そのなかで将来必要な力を身につける」と考えられている。しかし、ごく当然と思われているこの子育て観が、実は、いまの時代に特異なものでしかない。それは高々、ここ50年の話。人間が文化を気づきはじめてからの歴史を1万年として、そのうちの9950年はそうではなかった。

◎この50年で、子どもが変わったわけではない。子どもが生きる状況が変わったのだ。

この50～60年で何が変わったか。かつて、子どもの背には「背負った薪」「背負った弟妹」があった。つまり、子どもたちはその背中に＜共同の生活＞を背負い、子どもなりの手持ちの力を使って、周囲の人々と＜守る―守られる＞関係を生きていた。

しかし、いまの時代を生きる子どもたちが背に「背負ったカバン」には、＜個人としての自分の将来＞、それに対する親の期待が詰め込まれている。実際、いま子どもたちはみな、おとなになったとき、それぞれ個体単位で持っている力（能力・知識・技能・資格）によって職を得て、そこで与えられた賃金で生きる以外にない。

◎いまは「個」がむき出しになった時代

このようにして「個」を軸に生きる以外にない状況のなかで、そこにさまざまな問題が噴出し

ている。
学ぶことが、学校という制度の梯子を上ることに集約されてしまい、その「制度的意味」が子どもをそして親を縛る。学んで身につけた力は、個のもつ「能力」「学力」として個人単位で測られ、順位づけられ、これが子どもたちの人生を左右する。

結果として、子どもたちが学んで身につけた力も、自分たちの生活（広義）のなかで使われ、生かされて、その生活世界の広がりにつながるということになっていかない。学びの「実質的な意味」が看過され、ないがしろにされて、その「制度的意味」が世の中を席卷する。そうして親も、そして子もそこに生み出された「錯覚」の渦に、自ら巻き込まれ、抜け出せない。

2 「援助」が「自分の失敗」を奪うとき

子どももおとなも、徹底的に「個」になっていくとき、「発達支援」や「特別支援教育」もまた、結局は、その「個」の支援にとどまって、そこに発する矛盾が巧妙に隠蔽されてしまう。

◎子どもたちへの「個別支援」は「共に生きるかたち」を損なう

それは「子どもたちの利益のために」という名目の下、子どもたちを能力別に仕分けていく。現にインクルージョンという建前の下にいま展開されている「特別支援教育」は、かつての別学体制をさらに強化するものとなっている。

◎「個」の支援自体が、人の「共に生きるかたち」を歪めかねない

たとえば、「発達障害」の子どもたちに対するソーシャルスキルトレーニングの例に考えてみる。ソーシャルスキルは「人一般」に対する対人関係能力と思われている。しかし、世の中には「人一般」などという人はいない。人のなかには、赤ちゃんもいれば幼児もいるし、元気な老人もいれば認知症の老人もいる。障害をもたない人もいればもつ人もいるし、対人関係の得意な人がいれば苦手な人もいる。ソーシャルスキルとは、厳密に言えば「いろんな人と付き合うソーシャルスキル」であるはずである。

ソーシャルスキルが苦手な子どもを取り出して集め、ソーシャルスキルの訓練をすれば、逆にソーシャルスキルの問題のない子どもたちは、ソーシャルスキルの苦手な子どもたちと関わる機会をそれだけ失い、ソーシャルスキルの苦手な、ちょっとややこしい子どもたちと付き合うソーシャルスキルを奪われていく。そこに「共に生きるかたち」は生れてこない。

◎人が失敗しそうな場面で「支援」の手を差し伸べることが、人から失敗の機会を奪う

「支援」を受けることが常態になった人たちは、自分が失敗したとき、その失敗を「自分の失敗」として受けとめることができず、下手をすれば、それが「支援者のせい」になってしまう。逆にまた、自分が成功しても、それは「自分の成功」にはならない。そこでは、自分と周囲世界の間にいつも「被膜」がはりめぐらされてしまう。

それはまさに菊池寛の「忠直卿」状況である。

3 「支援」「援助」の再定義を

個体能力の発達を競うこの時代にあっても、人が生きるのに必要なのは、自分の手持ちの力で身の回りに張り巡らせる「人どうしの関係の網の目」である。その網の目を失ったとき、人の生活世界はもろくも崩れる。

◎奇妙な被膜を間に挟むことなく、たがいの＜生きるかたち＞を交し合うこと

そのような場が、いま子どもたちとおとなたちのあいだにあるのだろうか。学校は、子どもたちの同年齢の輪切り集団となり、そこに競い合う励み（と妬み）、群れ集う喜び（と排斥）はあっても、異世代で味わう＜守り－守られる＞関係はない。

学校にいるおとなたちは、支援者あるいは評価者や管理者にはなりえても、一人の異世代のおとなとして登場しない。結果として、いま学校には、いま子どもとおとなの共同の＜お喋り空間＞、＜生活空間＞がない。

◎人の生きるかたちは、ある意味はっきりしている

人は、いま手持ちにして力を使い、自分のいまのできなさを引き受け、適当にやりくりしながら、この自然のなかを人とともに生きる。ただそれだけである。そのなかで人は、自分の手持ちの力で何かを行い、そのことで人が喜ぶことを喜ぶ。そうした関係の網の目をつくり出せなければ、どんな子どもたちも巣立っていくことはできない……。

◎いま私たちには、「援助」や「支援」を再定義し、その関係をあらたに組み換えていくことが求められているのではないか。